

## 作新学院大学 ティーチング・ポートフォリオ

所属	氏名	作成日
人間文化学部発達教育学科	牧 裕夫	2024年5月1日

### 【責務】(何をおこなっているのか/担当授業科目その他)

【学内】「公認心理師の職責」「感情・人格心理学」「卒論指導演習Ⅰ・Ⅱ」「学校臨床心理学討論」「臨床心理実習」「心理演習」「心理実習 A・B」「特別指導Ⅰ・Ⅱ」「特別支援教育総論」「教育相談」「専門演習」「臨床心理学特論Ⅱ」「災害時のトラウマ支援」「プレインターンシップ」

【学外】「性的マイノリティ電話相談部会 SV(県人権施策推進室事業)」「カウンセリング研究法(県カウンセリング協会)」「カウンセリングケースフォームレーション(県カウンセリング協会)」「災害時でのトラウマ支援(鹿沼市)」「県スクールカウンセラー上都賀地区スーパーヴァイザー(例年3件位の自死案件を含む緊急支援に対応)」

### 【理念】(どのような考えに基づいて行っているか)

◎臨床現場に20年位の体験、大学人としても臨床心理センター、スクールカウンセラーとして実践を体験している。実践部分のテーマには守秘義務の部分があるが、その点に配慮しながら自身の週単位での体験を受講者に問いながら進めている。

◎学部の場合は心理学として日常での体験との対比、関連を常に意識した内容に留意している。学部「専門演習」での個々の発表に対して求めているのはそれぞれの個性(大学生としてのプライド)、それに対して専門性をどう関連させるか…

◎大学院授業では前述のとおり自身の臨床体験からの専門職理論・技法との関連を意識しているが、常に公認心理師、臨床心理士試験との関連に常に留意してコメントしている。

### 【方法】(その考えをどうやって実現しているか)

◎学部では「日常との関連」「カウンセラーだけじゃない心理学」等大学院と共通しているのは「小職の実践体験から」「今日の動向及び時代的な変遷」から今日の展開を意識した展開である。

◎大学院関、「相対化」自身の立場も他(多)領域との関連から明確になる。その態度はカウンセリングでも同じことで、常に他の視座からどうアセスメントができるのかを問う態度が望まれる。

◎そもそも「お話療法」「遊び療法」等極めて日常体験から展開している。他者からは「楽しそうに短い時間お話ししている」<ただ遊んでいるだけじゃないか>とみられる。不幸なことにカウンセラー自身も日常の「お話し」「遊び」としてか見れていないことである。時に「お話し」「遊び」の臨床・発達的な見立てができず、外部から見ても何か変わったカタチをとろうとする。そこに日常での「お話し」「遊び」等への多様な専門的な見立てが基本にあることである。答えは一つではなく、常にその都度的にやり取りの中で見立てが広がり、同時处理的な見立てに組み直しが行われていることの意味を求めている。

**【成果】**(その方法を行った結果、どうなったか、どうだったか。自身の感想・具体的な成果物・学生からのコメントなど)

◎学部ではリアクションペーパー、発言を求める、ディスカッションを設定する等はほとんどしていない。アンケート調査には「自ら取り組んだ」的な部分はやはり低い評価となっている。講義としてテーマ間を意識した展開も意識している反面「全体の進行がつかめない、同じ話ばかりしている」となっている。正直、授業他で臨床心理センターでの相談業務があり10年を越えてほとんど土曜日にも対応し、また他での学外でアルバイトもしていない。リアクションペーパー等からの展開も必要とは常に改善は必要を意識している。

◎逆に大学院、自身のゼミ生とは臨床心理センターケース関連で、前・後のカンファには相当な時間を費やしている。

◎大学院授業では、流れが分からない・等のコメントもあるが、むしろ大学院らしい授業・という評価もある。小職自身の昭和な性格から、また今日の自身を振り返り、授業の中で自身の将来の臨床を左右する一言に出会うか・そこへの「出会い」への期待、センス失くしてカウンセラー、セラピストとしてどうかと思う。ただ、勿論現状の大学院でもその気位を有する院生も少なからず在籍している。

**【目標】**(今後どうするか)

◎今も日々、全ての授業を念頭に資料の修正を繰り返している。結果的に昨年と同じ資料での授業はしていない。それを繰り返すことがまず第一。正直、センターケースで授業以上の時間を必要としている。正直、修論指導でもかなりの時間を必要としている。本来は授業の展開も少なくともリアクションペーパーからの振り返りは自身としても(かなり)理想としたい。「学生からの繰り返しが多い」?これも異なった領域の関連性を述べている、振り返っているに過ぎないのだが・・・この点もリアクションペーパーにて受講者との相互性から改善しえるところだ。

◎大学院に関しては学問的「相対化」への態度が関連しているかに思える。前述したが他理論・他技法から自身の立場を深めていく態度は臨床として不可避である。また資格試験への対応としても求められるところである。少なくとも本学での10年位小職ゼミ生の資格試験合格率は高い(特に現役合格率としても80%を越え、昨年度は3人ゼミ生全員が合格している、内2名は本学部出身者)。県職心理職としても2名、昨年度は1次試験まで2名合格した。